

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02698

研究課題名(和文)美術鑑賞学習のルーブリック評価と授業モデルの普及に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical Research for the Art Appreciation Learning by Rubric Evaluation and the Spread of Lesson Models

研究代表者

新関 伸也(Niizeki, Shinya)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：80324557

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本美術教育学会の研究チームが作成した「美術鑑賞ルーブリック」の有効性を検証するために、日本や台湾の小学生や中学生を対象にした美術鑑賞の授業を研究協力者に依頼して行った。その結果「美術鑑賞ルーブリック」は、鑑賞学習の目標や評価の指標となるだけでなく、省察の観点となることが証明された。従って、「美術鑑賞ルーブリック」は、鑑賞学習の改善や実践の普及に役立つツールとして期待される。今後の研究課題は、「美術鑑賞ルーブリック」を活用した鑑賞学習の実践をくり返して行いながら、ルーブリックをバージョンアップすることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究者と実践者が協働的にすすめた実践的研究で独自性のある鑑賞学習のルーブリックの活用により、学校教育における美術鑑賞学習の普及に寄与できる。また、実践面における美術鑑賞授業モデルの集約、発信、講習会による研修等によって図画工作科、美術科の目標と評価の質的改善が実現できる。特に、評価に関わり「観点を固定化させないこと」と「有効な指標をもつこと」の両面から「新しい学力観への提言」が美術教育から可能となる。

研究成果の概要(英文)： In this research, we asked research collaborators to teach art appreciation for elementary and junior high school students in Japan and Taiwan in order to verify the effectiveness of the "art appreciation rubric" created by the research team of Art Education Society of Japan. As a result, it was proved that "art appreciation rubric" is not only an index of appreciation learning goals and evaluations, but also a view point of reflection. Therefore, "art appreciation rubric would be expected to be a useful tool for improving appreciation learning and spreading practice. A future research subject is to upgrade the rubric while repeating the practice of appreciation learning utilizing the "art appreciation rubric".

研究分野：美術科教育

キーワード：ルーブリック 美術鑑賞 鑑賞学習 美術教育

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

学校教育における図画工作科、及び美術科の学習において、表現活動に比べて鑑賞活動の低迷が長らく指摘されており、現行の学習指導要領（図画工作・美術科・芸術科美術）において、鑑賞学習を重視する方針が明確に記述された。これらを契機に、国内の研究者による学校や美術館における教育普及活動を意図した美術鑑賞学習の研究や指導法の開発が促進され、出版物や研究会も多く開催されている。しかし、目標と表裏一体となった鑑賞学習評価についての研究は、先行事例も数が限られ不十分な状況にある。また、本格的に美術鑑賞においてルーブリック評価を取り込んだ研究もみあたらないため、本研究は独自性が高く、今後の学校教育における鑑賞学習に大いに寄与できると考えた。

・本研究チームの実績

- ① 東アジア（韓国、中国、台湾）における美術鑑賞教育の調査及びシンポジウム
- ② 日本初の第1回美術鑑賞学習に関する全国調査と分析（平成15～16年）
- ③ 鑑賞学習の普及を目指した出版（『西洋美術101 鑑賞ガイドブック』『日本美術101 鑑賞ガイドブック』三元社、現在4刷）（→中学校国語教科書（東京書籍）の「読書案内」に掲載）
- ④ 『西洋美術101 鑑賞ガイドブック』『日本美術101 鑑賞ガイドブック』の台湾にて翻訳出版
- ⑤ 鑑賞学習の授業モデル及び視覚教材の開発「対話型」、「比較型」、「アートゲーム型」、「混合型」の指導事例を映像で収録及び20題材開発（印刷冊子とDVD作成／配付）
- ⑥ 第2回美術鑑賞学習に関する全国調査と分析（平成27年）→日本美術教育学会webページに集計結果を公開中
- ⑦ 鑑賞学習ルーブリック評価（コモンルーブリック、作品ごとのルーブリック）の作成、それらをした授業実践及び検証

(2) これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

本研究チーム（日本美術教育学会の役員を主力とする）は、過去10年以上にわたって、学校教育における美術鑑賞学習について、上記の実績にあるように、国内で先導的な役割を果たしてきた。また、研究成果を学会及び研究会、教育現場に積極的に還元してきており、国内外から一定の評価を得ている。

一方、次期学習指導要領「改訂の基本方針」に、学校教育において身に付けるべき資質・能力の三つの柱である「(1)基礎的・基本的な知識・技能、(2)知識・技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、(3)主体的に学習に取り組む態度」と学習評価の充実が明記された。これに対応した学習指導及び評価などの具体的な対応改善策が求められている。本研究チームでは、教育政策動向をにらみつつ、新学習指導要領を見据えて対応させつつも、その方向性を吟味・検証しうる鑑賞学習ルーブリックの評価を通じて、図画工作科及び美術科の質的な授業改善に資する研究を推進していく。

(3) これまでの研究成果を発展させる内容

本研究チームは、このような研究経緯や成果を踏まえつつ、全国調査などの課題から明らかになった美術鑑賞学習の目標と評価の困難性に対処する。また、図画工作科や美術科の評価の具体策を提示すべきであると判断し、平成29年度に告示される新しい学習指導要領教

科目標に対応し、鑑賞学習ルーブリックと授業モデル開発の実証研究をテーマに設定した。平成 28 年度中に鑑賞学習のルーブリックを独自に完成させ、東西の美術作品から選定した基準作品（葛飾北斎《神奈川沖浪裏》、俵屋宗達《風神雷神図》、ダリ《記憶の固執》、ミロ《アルカンの謝肉祭》、ワイエス《クリスティーナの世界》）によって、各校種で検証ながら改善をすすめている。更に以下の観点による整合性や精緻化を図り、より活用しやすいルーブリックにするため、継続した研究が必要である。

・鑑賞学習ルーブリック改善の観点

①既存ルーブリックにおける課題及び基本的な構成に対する検討

②図画工作科、美術科の「資質・能力の三観点」や観点別評価 4 観点（評価規準）との関連性

③児童・生徒など学習者の視点から鑑賞ルーブリックのカスタマイズの可能性をさぐる

④国外の美術鑑賞学習において、鑑賞ルーブリックの妥当性の確認と比較

2. 研究の目的

本研究チームが実施した小・中学校の教員を対象とした全国調査の結果、美術鑑賞学習において目標と評価の設定について困難性が高いことが明らかとなった。この目標と評価の設定の課題を解決するために、汎用性のある独自の「鑑賞学習のルーブリック」を作成し、研究協力者の所属する幼・小・中・高校などの実践の場で検証をしながら改善を図ってきた。

本研究では、①鑑賞ルーブリック評価を活用した美術鑑賞学習の授業モデルを開発し、②国内や国外（米国・中国・台湾・韓国）の研究協力者とともに実践分析的な研究を行う。これらの成果を③公開研究会や web ページで広く周知するとともに、④『ルーブリック評価による美術鑑賞学習のすすめ（仮）』を出版して、評価を軸にした美術鑑賞の普及拡大を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 鑑賞ルーブリックの精緻化のために、幼小中高で実践研究を重ね改善を図る。改善では、新学習指導要領の学力観、教科の観点別評価に対応させる。

(2) 鑑賞ルーブリックに基づく授業モデルを国内外の研究協力者とともに検討開発し、普及と活用のための映像資料を作成する。

(3) 目標及び評価方法などを解説した鑑賞ルーブリックを活用した授業モデルを集約し、web ページ、公開講座、国際シンポジウム、国内研究会で広く発信や活用を呼びかけ、普及拡大を狙う。これらの研究成果を出版に結びつける。

・1 年目

鑑賞ルーブリック評価の精緻化のために、各地域の幼・小・中・高校で実践研究を重ね改善を図る。改善では、新学習指導要領の学力観、教科の観点別評価に対応させる。

(1) 鑑賞ルーブリックの改善及び精査を行う。

(2) 国外の研究者と連携して教育方針を含めた実践研究の場をもつことによって、鑑賞ルーブリックを活用した実践研究を推進する。

・2 年目

ルーブリックを活用した美術鑑賞学習の授業モデルを研究協力者とともに開発し、校種ごとに取りまとめをする。また、国外での実践検証を行い、鑑賞ルーブリックの国際的な知見から妥当性を高める。

- (1)鑑賞ルーブリックを活用した授業モデルを開発し、実践普及の基盤を構築する。
- (2)国外の研究者と協働して研究会及び実践授業を実施し、比較検討を行う。
- (3)国内外での鑑賞ルーブリックによる美術鑑賞学習の実践をまとめる。

・3年目

実践研究を行いながら、鑑賞ルーブリックを活用した授業モデルを集約し、目標及び評価方法などを解説した冊子（DVD 付）を作成するとともに、web ページ、出版、公開講座、研究会で広く活用を呼びかけ、発信し、国内外の教員に研究成果を還元する。

(1)鑑賞ルーブリックを活用した美術鑑賞学習のモデル題材を作成し、研究協力者の実践を撮影し編集した DVD を作成する。

(2)美術鑑賞学習モデルを日本語の他、中国語・英語に翻訳したものを構築した web ページに掲載し、国内外に発信する。

(3)国外の研究者を招き、美術鑑賞学習国際シンポジウムを開催する。

(4)本チームで『ルーブリックで変わる美術鑑賞学習』を出版する。

(5)国内教員向けの公開研究会を開催し、研究成果を普及する。

4. 研究成果

(1)2017 年度は、鑑賞学習ルーブリック評価の精緻化のために、各地域の幼・小・中・高校で実践研究による実証授業を重ねつつ、課題や改善点を見いだすとともに、美術鑑賞学習の指導方法改善のために研究交流を深めた。特に授業実践については、北斎《神奈川冲浪裏》、ミロ《アルルカンの謝肉祭》等の作品を基準作品として、校種の違いによる検証を重ねた。研究代表者や各分担者と小中高校の教員とが共に研究をすすめてきたことが実践研究では重要であることを再認識することができた。一方、本研究以前の実践も含めた鑑賞学習の指導法について、ルーブリック活用と重ね合わせた公開研究発表会を東京及び滋賀において開催した。それらの開催によって研究の社会的還元の重要性も自覚することができた。また、8 月には韓国、大邱（テグ）にて開催された国際美術教育学会（InSEA）世界大会において、「美術鑑賞学習のルーブリック評価による授業モデル」と題して発表を行った。また、3 月の美術科教育学会においても同様の発表を行ったが、予想以上の聴講がありルーブリックに対する関心の高さがうかがわれた。これらの研究成果として、鑑賞指導案集（約 20 題材）をまとめることができた他、ルーブリックを活用した鑑賞学習は、教師の目標と評価が明確になり授業改善に資することが明らかとなった。また、鑑賞学習での教師及び児童の発話等を中心に行った授業分析では、省察の観点も明確になることで授業改善の指針を示せるようになった。

(2)2018 年度は、5 月に小・中教員向けに「美術鑑賞ルーブリック評価」活用セミナーを滋賀大学大津サテライトプラザで開催し、鑑賞学習の進め方や授業開発に資するルーブリックの活用方法について講ずるとともに、実践者や参加者から現場での活用についての改善意見を聞くことができた。また、鑑賞ルーブリックを活用した授業モデル開発のために、小・中学生の発達段階に適したフォアン・ミロ《アルルカンの謝肉祭》及び葛飾北斎《神奈川冲浪裏》を基準作品として選定した。これらの作品を対象にして、小・中学校教員である研究協力者とともに実践授業を積み重ねた。特に、同一作品による児童・生徒の発達の差による鑑賞内容の相違について確認することができた。さらに、これらの実践を分析することでルーブリックの妥当性を確認しつつ、同一題材による授業モデルの改善を試みた。一方、海外では米国・ポートランド州、カナダ・オンタリオ州、台湾の小・中学校や美術館での鑑

賞教育の実態をリサーチするとともに鑑賞ルーブリックに対するヒヤリングを行い、項目やレベルについての妥当性について意見を聞くことができた。また国内では、本研究の成果をまとめ、鑑賞ルーブリックを活用した学習を普及するための出版企画を立案するとともに、研究成果を発信する「美術鑑賞学習 web ページ」のコンテンツについて検討した。

(3)2019年度は、これまでの研究を整理しつつ「美術鑑賞学習 web ページ『ルーブリックで変わる美術鑑賞のすすめ』<https://www.kansyokyoiku.com/>」を作成、公開することができた。また、2020年2月に台湾の小学校において美術鑑賞に関する実証授業の予定であったが、コロナ禍によって海外渡航が困難となったため5月に計画を変更しても渡航がかなわなかった。また、それらの調査の結果を踏まえて、同年7月までに研究成果をまとめる予定であったが、それも困難となった。そのため、研究期間延長手続きをとることとなった。

(4)2020年度は、研究期間延長となり、これまで継続してきた本研究成果を包括的にまとめて、新関伸也・松岡宏明編著『ルーブリックで変わる美術鑑賞学習』を2020年12月に三元社より出版することができた。本書は、日本美術教育学会・学会誌「教育美術」303号「書評」(2021年3月)、美術科教育学会・会報「書評」(2021年6月)、美術教育振興会『教育美術』946号「文献紹介」(2021年4月)に掲載され、美術鑑賞学習の改善や普及に資する優れた内容であるとの評価を得ることができた。

また、本研究での鑑賞実践の映像記録を元にルーブリックによる観点と解説を入れて編集した美術鑑賞学習の映像集を作成した。これらの映像集を「美術鑑賞学習実践映像集」と題してDVDを1500枚作成し、教育現場の先生方や教員養成学部の学生に無償配布して、鑑賞学習の普及に役立てることができた。今後もこの映像DVDを活用して普及する予定である。加えて、本研究成果をより広く教育現場に還元するために、代表者及び分担者によるオンラインによる「ルーブリックによる美術鑑賞学習」を2021年5月より12月まで8回にわたって、セミナーを行っている。現時点で、2回目のセミナーを終えたが、いずれも回も約100名の参加があった。

このように「美術鑑賞ルーブリック」は、鑑賞学習の目標や評価の指標となるだけでなく、省察の観点となることが証明されたと言えよう。今後「美術鑑賞ルーブリック」は、鑑賞学習の改善や実践の普及に役立つツールとして期待されている。今後の研究課題として、鑑賞ルーブリックを活用した鑑賞学習の実践を繰り返し行いながら、このルーブリックを改善しつつ、教育現場での美術鑑賞学習の普及につとめたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 新聞伸也, 村田透	4. 巻 51
2. 論文標題 ルブリック評価による美術鑑賞の実践と考察 - フェルメール《青衣の女》を通して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 241-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新聞伸也, 村田透	4. 巻 303
2. 論文標題 鑑賞学習指導に関する海外調査報告 - カナダ・オンタリオ州 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育	6. 最初と最後の頁 58-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大橋功・藤田雅也	4. 巻 303
2. 論文標題 鑑賞学習指導に関する海外調査報告 - 台湾 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田雅也・松岡宏明	4. 巻 303
2. 論文標題 鑑賞学習指導に関する海外調査報告 - 米国・ポートランド -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育	6. 最初と最後の頁 48 - 57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松岡宏明	4. 巻 -
2. 論文標題 保育者・初等教育者に求められる幼児・低学年児の造形を『みる力』に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 博士（教育学）論文），大阪総合保育大学大学院児童保育研究科	6. 最初と最後の頁 1-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 新関伸也・村田透
2. 発表標題 鑑賞ルーブリックを活用した図画工作科の実践と省察 - フェルメール《青衣の女》を通して -
3. 学会等名 日本美術教育学会三重大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新関伸也・村田透
2. 発表標題 カナダ・オンタリオ州における芸術教育 - 芸術教育カリキュラムの特徴及び芸術学校と美術館調査を通して -
3. 学会等名 美術科教育学会札幌大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MATSUOKA Hirotoishi1, OHASHI Isao, NIIZEKI Shinya, FUJITA Masaya.
2. 発表標題 A Report of the Current Situation of Art Appreciation Education in Schools in Japan and A Study of the Effect of Utilizing the Art Appreciation Rubric
3. 学会等名 2017 InSEA World Congress / International Society for Education through Art (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松岡宏明
2. 発表標題 「鑑賞学習ルーブリック&ガイド」の作成とその活用実践
3. 学会等名 美術科教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大橋功, 新関伸也, 松岡宏明, 藤田雅也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本文教出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 美術教育概論(新訂版)	

1. 著者名 新関伸也, 松岡宏明, 大橋功, 藤田雅也, 村田透, 萱のり子, 佐藤賢司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 128
3. 書名 ルーブリックで変わる美術鑑賞学習	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松岡 宏明 (Matsuoka Hirotoshi) (10321184)	大阪総合保育大学・児童保育学部・教授 (34445)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大橋 功 (Ohashi Isao) (70268126)	岡山大学・教育学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	藤田 雅也 (Fujita Masaya) (80524339)	静岡県立大学短期大学部・短期大学部・准教授 (43807)	
研究分担者	村田 透 (Murata Thoru) (30469473)	滋賀大学・教育学部・准教授 (14201)	
研究分担者	佐藤 賢司 (Satho Kenji) (10283045)	大阪教育大学・教育学部・教授 (14403)	
研究分担者	萱 のり子 (Kaya Noriko) (70314440)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	大嶋 彰 (Ohshima Akira) (90176868)	立教大学・文学部・特任教授 (32686)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	堤 祥晃 (Tsutsumi Yoshiaki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中西 さおり (Nakanishi Saori)		
研究協力者	松浦 藍 (Matsuura Ai)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
その他の国・地域 台湾	台湾教育部 実践藝術教學研究中程計畫 2020視覺藝術欣賞教學公開授課研習会		